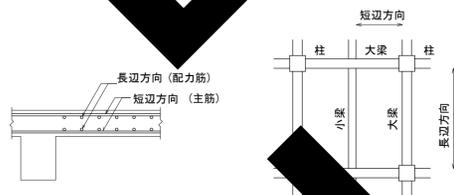


5.1 スラブリの配筋

表5.1 スラブリの配筋

配筋種類	短辺方向 (主筋) 全域	長辺方向 (配力筋) 全域	配筋種類	短辺方向 (主筋) 全域	配力筋
S 1	D13-100 ϕ	D13-100 ϕ	S 8	D10, D13-150 ϕ	D10-150 ϕ
S 2	同上	D13-150 ϕ	S 9	同上	D10-200 ϕ
S 3	同上	D10, D13-150 ϕ	S10	D10, D13-200 ϕ	D10, D13-200 ϕ
S 4	D13-150 ϕ	D13-150 ϕ	S11	同上	D10-200 ϕ
S 5	同上	D10, D13-150 ϕ	S12	同上	D10-250 ϕ
S 6	D10, D13-150 ϕ	D10-150 ϕ	S13	D10-200 ϕ	D10-200 ϕ
S 7	D10, D13-150 ϕ	D10, D13-150 ϕ	同上	同上	D10-250 ϕ

(注) 上端筋, 下端筋と記載する。



1. 配筋の割付けは, 中央から行い, 端部は定められた間隔で打ち出す。
2. 鉄筋の重ね継手長さは, L_1 とする。
3. 土間コンクリート補強筋の配筋及びコンクリート厚さは, 構造仕様書に準ずる。

図9.1 スラブリの配筋

5.2 スラブリ筋の定着及び引き出し

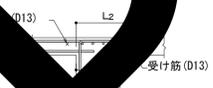
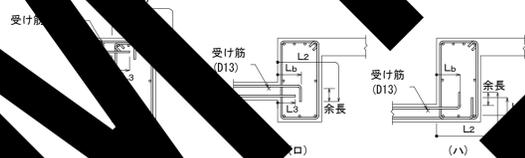
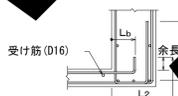


図5.2 スラブリ筋の定着及び引き出し(その1)



一般スラブリの場合



耐圧スラブリの場合

図5.3 スラブリ筋の定着及び引き出し(その2)

5.3 片持スラブリの配筋

配筋種類	主筋	配力筋	主筋	配力筋
CS1	上 D13-100 ϕ	CS5	上 D10-200 ϕ	
	下 D13-200 ϕ		下 D10-400 ϕ	
CS2	上 D13-150 ϕ	CS6	上 D10, D13-200 ϕ	
	下 D13-300 ϕ			
CS3	上 D10, D13-150 ϕ	CS7		
	下 D10, D13-300 ϕ			
CS4	上 D10, D13-200 ϕ			
	下 D10-200 ϕ			

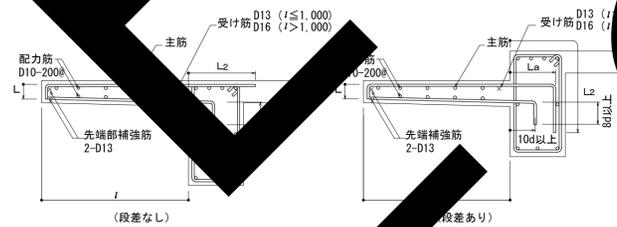


図5.4 片持スラブリの配筋 (CS5)

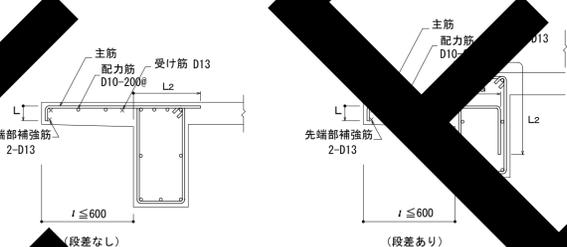


図5.5 片持スラブリの配筋 (CS6 及び CS7)

5.4 片持スラブリの先端に壁がある場合の配筋

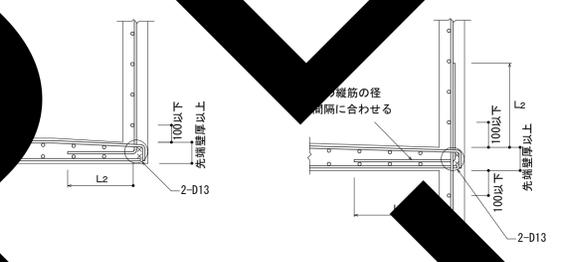
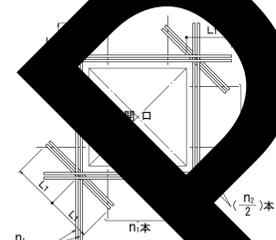


図5.6 先端に壁が付く場合の配筋

5.5 スラブリの開口部の補強

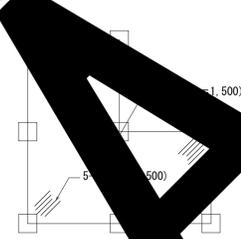


1. スラブリ開口部の周囲に同量の鉄筋で周囲を補強し, 隅角部は $2-D13$ ($L=2L_1$) シングルを上下筋の内側に配筋する。
2. スラブリ開口部の最大径がスラブリ厚さの1/2以下で, 鉄筋を緩やかに曲げることによって開口部を避けて配筋できる場合は, 開口部の最大径がスラブリ厚さの1/2以下の場合, 開口部の補強筋を省略することとする。

図5.7 スラブリ開口部の補強配筋

5.6 出隅部及び入隅部の補強

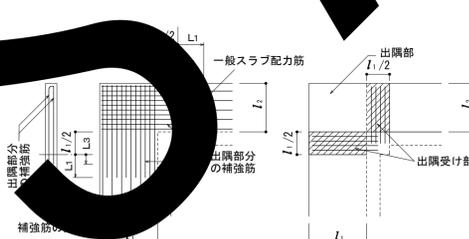
(1) 屋根スラブリの出隅及び入隅部



1. 補強筋を上下筋の下に配筋する。

図5.8 出隅及び入隅部の補強

(2) 片持スラブリの出隅部

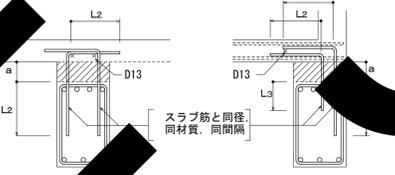


1. $L_1 \geq L_2$ とする。

図5.9 片持スラブリの出隅部の補強配筋

5.7 スラブリの打継ぎの補強等

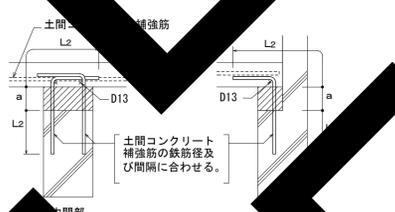
(1) 土間スラブリの打継ぎ補強 (基礎梁とスラブリを一体打ちとした場合の補強を示す)



1. 土間スラブリの打継ぎ補強は, 基礎梁及び柱を介して基礎へ荷重を伝達するものとする。
2. a が 300mm 以下の場合, 基礎梁の断面に合わせる。

図5.10 打継ぎ補強配筋

(2) 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋



1. 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋は, 基礎梁とスラブリを一体打ちとした場合, 基礎梁の断面に合わせる。
2. a が 300mm 以下の場合, 基礎梁の断面に合わせる。

図5.11 土間コンクリートと基礎梁との接合部配筋

6.1 片持スラブ形階段の配筋

表6.1 片持スラブ形階段の配筋

配筋種別	KA1	KA2
配筋図		
配筋種別	KA3	KA4
配筋図		

1. 壁配筋は、4.1(2)による。
2. 階段主筋は、壁の中心線を越え、縦に下ろす。
3. スラブ配筋の継手及び定着長さは、標準仕様書(表5.3.4)のL₂とする。

片持スラブ形階段の定着

6.2 二辺固定スラブ形階段の配筋

表6.2 二辺固定スラブ形階段の配筋(とも(全域))

配筋種別	
KB1	D13-200@
KB2	D13-150@
KB3	D13-100@
KB4	D13, D10
KB5	D16-150@
KB6	D16-125@
KB7	D16-100@

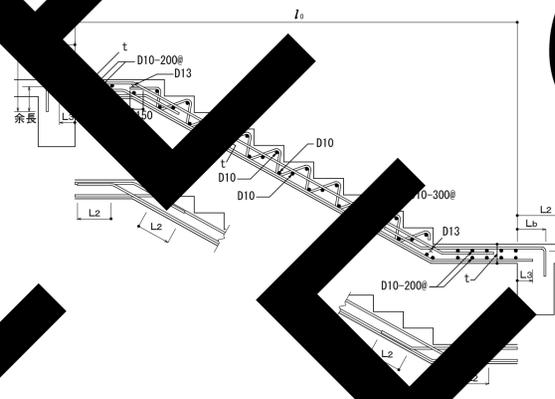
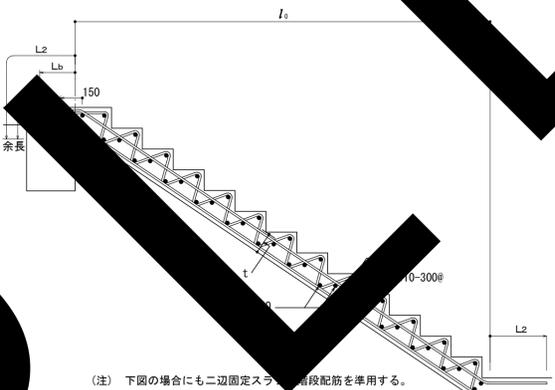


図6.2 二辺固定スラブ形階段配筋(その1)



(注) 下図の場合にも二辺固定スラブ形階段配筋を準用する。

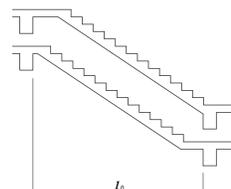


図6.3 二辺固定スラブ形階段配筋(その2)

梁貫通孔の配筋

- (1) 梁貫通孔補強筋の名称等は、図7.1、図7.2による。
- (2) 孔の径は、梁せいの1/3以下とする。ただし、上部は梁下端よりD/3 (Dは梁せい)の範囲には付けてはならない。
- (3) 孔の上下方向の位置は梁せいの1/3以下とする。ただし、耐圧スラブ付きの場合は、梁上端よりD/3の範囲には孔を付けてはならない。
- (4) 孔は、柱面から、原則として、1/3以下とする。また、壁及び壁付帯梁は除く。
- (5) 孔が並列する場合の中心間隔は、1/3以下とする。
- (6) 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に、あばら筋の長さ、図7.1、図7.2による。
- (7) 補強筋は、主筋の内側とする。また、あばら筋の長さは、図7.1、図7.2による。
- (8) 溶接金網の余長は1格子以上とし、突出しは、図7.1、図7.2による。
- (9) 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋1-13φのリング筋を、図7.1、図7.2による。なお、リング筋は、溶接金網に4箇所以上溶接し、図7.1、図7.2による。
- (10) 溶接金網の割付け始点は、横筋であばら筋の下部に、図7.1、図7.2による。他の開孔を設けない範囲は図7.3による。

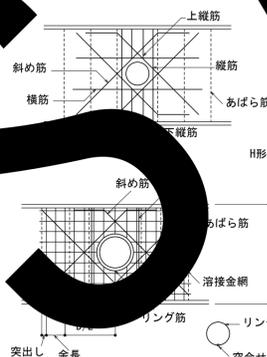


図7.1 H形配筋

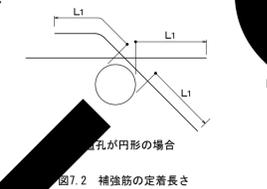


図7.2 M形配筋

梁貫通孔の補強形式

補強種別	縦筋	溶接金網	配筋図
M1	2-2-D13	なし	
M2	4-2-D13	なし	
M3	なし	2-6φ-100@	
M4	6-2-D13	なし	

(注)は、一般部分のあばら筋を示す。

補強種別	縦筋	溶接金網	配筋図
H1	なし	なし	
H2	2-D13	なし	
H3	4-2-D13	なし	
H4	4-2-D16	なし	
H5	4-2-D16	なし	
H6	4-2-D19	4-2-D13	
H7	4-2-D22	2-2-D13	

(注)は、一般部分のあばら筋を示す。

表7.3

配筋種別	斜め筋	縦筋	溶接金網	配筋図
MH1	なし	なし	なし	
MH2	2-2-D13	なし	なし	
MH3	2-2-D13	なし	なし	
MH4	2-2-D13	なし	なし	
MH5	2-2-D13	2-2-D13	2-6φ-100@	
MH6	2-2-D13	なし	なし	
MH7	4-2-D19	なし	なし	

(注)は、一般部分のあばら筋を示す。

7.3 コンクリートブロック縦壁との取合い

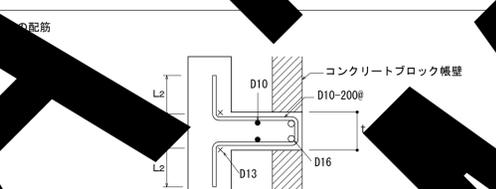


図7.3 縦壁の配筋(水平、垂直とも)

(2) 縦壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強

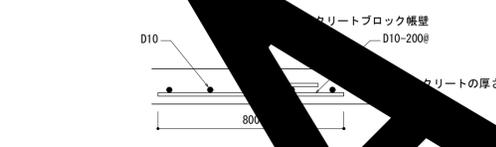


図7.4 壁付き土間コンクリート階段の配筋